



イルクオーレスタッフ 益永 鉄平

僕は「イルクオーレ」というイタリアンのレストランでシェフをしています。「イルクオーレ」とは「心から」という意味です。

「イルクオーレ」では「お客様の笑顔の為に」をコンセプトにし、お客様あってのレストランを目指しています。

では、お客様に笑顔になってもらう為には何が必要なのか？それは僕達自身が笑顔でいなくてははいけません。

イルクオーレではクレドというカードを持ち、朝礼で皆で読み上げています。クレドはお店の信念です。そこには、スタッフがどうあるべきかが書かれています。

そして、毎朝社長からキラキラメールが届きます。365日毎日届き、コミュニケーションツールとしての役割を果たしています。また、自分自身と向き合える場所にもなっています。

僕は学生時代、焼肉店でアルバイトをしていました。そこで、まかない（スタッフ用の食事）のおいしさで感動した事が今ここにいる原点になっています。また、友人の多くは同じく飲食店で働いている事もあり、自然と飲食店に関わる仕事に就きました。

僕は今、この飲食店に関与した本をつくる事を夢にしています。その為にはもっと経験や学びが必要です。若かりし頃の夢はただ漠然としていて、ハッキリとはしていませんでした。時には周りに置いていかれるのではと焦りを感じる事もありました。しかし、色々な人達との出会いや繋がり、経験などで僕自身の夢が明確になっていきました。

レストランでお客様から「おいしかった」と言ってもらえるととても嬉しい。しかしレストランは、料理だけではありません。サービスや空間作りも大切です。お店は決して一人ではできません。皆の協力のもと、一つのチームとして感動してもらえる様にすることが大切です。スタッフの一人一人が主役であるのです。そして、感謝する事を忘れてはなら

ないのです。また仕事を楽しむ事、それは、楽しいから笑顔になるのではなく、笑顔でいるから楽しめる事を学びました。

僕達は食事を通して幸せになってもらえる様、常に努力しています。

僕には妻と子供が二人（二歳と四歳）います。父を小学校の入学前に亡くし、母と祖母に育てられたため、模範となる「父親」はなく、自分なりの「父親」をしています。「父親」になる事は簡単ですが、「父親」であり続ける事の難しさを噛み締めています。



先日、東日本大震災が起き、被災地はとても苦しい状態です。僕達は今、何をすべきなのか？それは、今できる事をしっかりとやることではないでしょうか。イルクオーレでも自分達に何ができるのか考え、募金をつのり、スタッフとお客様からの募金を義援金として送りました。



僕の妻の実家は酪農を営んでいます。また、野菜をつくる友人も多い。食を通して家族や地域、会社や社会が繋がっています。その繋がりを豊かにすることで更に多くの人々の幸せにつながるのではないかと僕は思います。

イルクオーレ新前橋

群馬県前橋市古市町1-1-1

TEL 027-254-3025 11:30~22:00 定休日:月曜・第3火曜

筆者紹介に代えて

益永鉄平さんはフォーラム会員益永陽子さんの息子である。

彼について印象深く思い出すことがある。10年前、2000年の2月27日、アムネスティ・インターナショナルの会員が中心になって活動している「人権の会」主催で、1994年松本サリン事件において冤罪をかけられた河野義行さんの講演があった。益永鉄平さんは当時17歳。主催メンバーの中心に母と祖母がいた。講演後の道すがら、若い彼の存在に「どうして今日ここに来たの？」と尋ねると、「母ちゃんとばあちゃんを守るために来た」と、きっぱりと答えた。痛く冷たい北風の中をうつむき加減に歩く青ざめた横顔が素敵だった。

当時マスコミは連日地下鉄サリン事件（1995年）を起した「オウム真理教」を報道していた。そのオウムの信者たちが藤岡にやってきた。市と住民はオウムの信者に対して住民票不受理、ライフラインを切断しようとしていた。それは法治国家として正しいのか。毒ガス「サリン」という殺人兵器を用いた教団員（幹部）と普通の教団員（信者）と分けて考えるべきで、「思想信条の自由」、彼らにも人権があるのではないか。そんな主催者の意図であったから、17歳ではあったけれど、二人が何らかの危害を受けるのではとの心配でたまらなかったのであろう。

あれから10年、「そんなことあったっけ、覚えていない」とうそぶく鉄ちゃんは今28歳、より素敵になっていた。（藤原麗子）